

2024 年度若手研究者共同研究プロジェクト実施報告書

法政大学総長 殿

以下のとおり研究実施報告書を提出します。

基 本 情 報	研究課題名：催馬楽古楽譜の電子テキスト構築と活用の実践
	研究代表者氏名：本塚 亘
	【在籍者】 研究科・専攻・学年：
	【修了者】 所属・職種：人文科学研究科 日本文学専攻 博士後期課程 2016 年度修了
	指導教員（所属・職・氏名）： （※在籍者のみ記入）
	共同研究者（所属・職・氏名）：文学部教授 スティーヴン・G・ネルソン （※指導教員と同人の場合は記入不要）
	その他 研究分担者：
	研究期間： 2024 年度 ～ 2026 年度（※研究終了年度を記載）
年 間 の 研 究 実 施 概 要	※研究計画の進捗状況を中心に今年度の研究実施状況を記載してください。 本研究は、催馬楽古楽譜の電子テキストを構築することによって、AI を含むデータ分析技術への貢献を目指す。催馬楽に限らず、日本の古楽譜を機械可読な形式で電子テキスト化する方法は確立されていない。そこで、国際標準である TEI (Text Encoding Initiative) / XML (Extensible Markup Language) に準拠した、書誌・歌詞・音楽構造を段階的にもつ催馬楽古楽譜の電子テキストを構築し、これを用いた分析の実践を行う。以上により、文学、言語学、音楽学など諸分野への応用が可能な、古楽譜の新たな記述形式とデータ活用モデルを提案する。 本研究計画は、Ⅰ. 望ましいテキスト記法の模索、Ⅱ. 電子テキストの段階的な構築、Ⅲ. データセットを用いた分析の実践 の3プロセスから成る。初めに、既存の翻刻資料や電子テキストの包括的な分析を行い、それぞれのメリットや課題、望ましいテキスト記法を模索、整理する（Ⅰ）。次に、TEI に準拠した A. 書誌構造、B. 歌詞構造、C. 音楽構造の3構造からなるデータセットを段階的に構築する（Ⅱ）。最後に、以上の工程で作成した各段階のデータセットを個別、または相互に用いて、資料間の対校、現代語訳の比較、旋律分析などの分析を試行する。分析の過程で、利用上の問題点・改善点を洗い出し、必要に応じてデータ構造を再構成する（Ⅲ）。 以下、研究計画書「研究方法」に記載した研究細目ごとに進捗状況を記載する。

I. 望ましいテキスト記法の模索

【進捗】催馬楽古楽譜や関連資料の先行注釈・翻刻資料、電子テキストおよび分析の実践例を分析し、それぞれのメリットや課題、望ましいテキスト記法を模索。本年度は関連資料の収集にとどめ、「II. 電子テキストの段階的な構築」の作業を先行して進めた。

【展望】「II. 電子テキストの段階的な構築」の作業を通じて得られた知見をふまえ、既存テキストの課題について検討を進めていく。

II. 電子テキストの段階的な構築

【進捗】TEIに準拠したA. 書誌構造、B. 歌詞構造、C. 音楽構造の3構造からなるデータセットを段階的に構築。本年度は、①鍋島報公会徴古館蔵『催馬楽』（鍋島家本）、②東京国立博物館蔵『催馬楽抄』（天治本）、③宮内庁書陵部蔵伏見宮家旧蔵『三五要録』の3本について、A. 書誌構造、C. 音楽構造のTEI記述を試行した。両者を先行したのは、Aはレイアウト上の、Cは音楽的に複雑な情報記述を必要とするためである。

A. 書誌構造について、まず、本文を一度シンプルなマークダウンテキスト形式で記述し、pythonを利用して一度HTMLに変換したのちXMLに再変換するプログラムを試作した。これにより、複雑かつ繁多なXML構造の記述を比較的簡易的に行うことができることが確かめられた。また、HTMLへの変換を挟むことによって、入力中のデータをブラウザに簡易表示させることにも成功、作業工程の改善につながった。①鍋島家本、②天治本については一通りの入力を終えた。

C. 音楽構造についても、「A. 書誌構造」の手法を応用して、マークダウンテキスト形式で一次翻刻を行い、先のpythonコードを修正してHTML、XMLを出力するプログラムを試作した。楽譜の解読方法については未解明な点、議論の分かれる点が多くあるため、最終的には客観性の高い、解釈の余地の少ないXML記述を目指したい。しかし、ある程度解釈を加えないと、音楽的な構造化を示すことが難しかったため、まずは仮説的な解読法を定め、これに基づいて記述を行うこととした。③『三五要録』巻第三、巻第四の催馬楽譜について、異説注記を除く本文についての記述を完了。その成果を、2024年10月、第14回日中音楽比較研究音楽シンポジウム（於京都市立芸術大学）にて、「国際標準（TEI）に基づく古楽譜の電子テキスト化『三五要録』の催馬楽譜による試み」として報告した。

【展望】いずれの作業も、比較的作業の簡略化に一定程度成功しつつも、技術的に煩瑣な作業が多く、属人的な面も改善できていない。特に、「C. 音楽構造」については、解釈の上で客観性に欠ける面があり、データの作成・利用の両面から、汎用性を追求したい。また、「B. 歌詞構造」についてのXML記述についても早急に試行を進め、A、B、Cの横断的なデータ連携についても視野に入れていく。

III. データセットを用いた分析

【進捗】「II. 電子テキストの段階的な構築」を先行して進めたため、まだ具体的なデータ分析は実現していない。上記シンポジウムにて、特に先行研究の評価・再検討に有効であろうとの見方・方針を提示した。

【展望】「I. 望ましいテキスト記法の模索」、II. 電子テキストの段階的な構築」の進捗をみながら、部分的に試行を進めていく。

研 究 業 績	成果発表（学会・論文・研究会等）		
	学会・論文・研究会等の別	タイトル	発行または発表年月
	第 14 回日中音楽比較研究音楽シンポジウム 於京都市立芸術大学	国際標準 (TEI) に基づく古楽譜の電子テキスト化『三五要録』の催馬楽譜による試み	2024 年 10 月
その他（アピールすることがあればご記入ください。）			